

モリー先生 との火曜日

Tuesdays with Morrie

ミッチ・アルボム

Mitch Albom

別宮貞徳＝訳



モリー先生 との火曜日

Tuesdays with Morrie

ミッチ・アルボム

Mitch Albom

別宮貞徳＝訳



モリー先生との火曜日

1998年 9月25日 第1刷発行

1999年 1月30日 第8刷発行

著 者——ミッチ・アルバム

訳 者——別宮 貞徳

発行者——安藤 龍男

発行所——日本放送出版協会

〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町 41-1

電話 (03)3780-3319(編集)

(03)3780-3339(営業)

振替 00110-1-49701

印 刷——三秀舎／近代美術

製 本——石毛製本

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

Japanese Edition Copyright ©1998 Sadanori Bekku

Printed in Japan

ISBN4-14-080383-5 C0098

Ⓔ 〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写(コピー)は、
著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

モリ―先生との火曜日

本書を、私の知るかぎりもっとも勇敢な人、弟のピーターに捧げる

モリー先生との火曜日 目次

カリキュラム ● 恩師の生涯最後の授業は、週に一回先生の自宅で行われた。 9

講義概要 ● モリーは死を人生最後のプロジェクトに据えた。私に学べ。 12

学生 ● 夢破れてからぼくは、仕事に夢中になった。 21

視聴覚教室 ● モリーは有名なインタヴューの番組に出演した。 25

オリエンテーション ● モリーとの再会。ぼくは昔のような将来のある学生ではなかった。 32

教室 ● 私は今でも君のコーチだよ。 37

出欠確認 ● モリーの過ごしている時間の質が、うらやましくなった。 46

最初の火曜日 —— 世界を語る 53

第二の火曜日——自分をあわれむこと 60

第三の火曜日——後悔について 66

視聴覚教室——第二部 ● テレビはモリーの死ぬまでを追いかけていた。 73

教授 ● 母の死。貧困。九歳でモリーは、両肩に山のような重荷を感じていた。 77

第四の火曜日——死について 84

第五の火曜日——家族について 93

第六の火曜日——感情について 103

教授——第二部 ● モリーはいつもすばらしい調停者になった。

112

第七の火曜日——老いの恐怖 118

第八の火曜日——かねについて 126

第九の火曜日——愛はつづく 133

第十の火曜日——結婚 144

第十一の火曜日——今日の文化 154

視聴覚教室——第三部 ●病気で肉体はやられても、精神はやられない。 162

第十二の火曜日——許しについて 166

第十三の火曜日——申し分のない一日 173

第十四の火曜日——さよなら 182

卒業 ●葬式は、火曜日だった。 188

むすび ●人生に「手遅れ」というようなものはない。 191

訳者あとがき 197



本書を書くにあたっては、はかりしれないご援助を頂戴した。シャーロット、ロブ、ジョナサン・シュワルツはじめモリー・スタイン、チャーリー・ダーバー、ゴードー・フェルマン、デイヴィッド・シュワルツ、ラビ・アル・アクセルロッドほかモリーの多くの友人、同僚の方々のご記憶、ご忍耐、ご指導のたまものと、心からお礼申し上げます。また、編集者のビル・トマスがこの計画を実に手際よく処理してくださったことにも、特別の感謝を捧げる次第である。そしていつものことながら、私が私を信じる以上に私のことを信じてくれるデイヴィッド・ブラックの厚情もうれしかった。

しかし、誰よりも、ありがとうございますと言わなければならないのは、この最終論文をいっしょに仕上げてくれたモリーに対してである。こんな先生、持ったことはありませんか？



© HEATHER PILLAR

カリキュラム

恩師の生涯最後の授業は、週に一回先生の自宅で行われた。書斎の窓際で、小さなハイビスカスがピンクの花を落としていた。毎週火曜日、朝食後に始まる。テーマは「人生の意味」。経験をもとに語られる講義だった。

単位はもらえないが、毎週口頭試問があった。先生の質問に答えなければならないし、こちらも質問を求められる。それにときどき肉体労働も必要。先生の頭を持ち上げて、枕の楽な位置に落ち着かせてあげるとか、眼鏡をきちんとかけてあげるとか。さよならのキスをすれば評点が上がった。

参考図書はいらないが、題目はさまざまで、愛、仕事、社会、家族、老い、許し、そして最後は死にまで及んでいた。最終講義は短くて、ほんのふたこと、みことで終わってしまった。

葬式が卒業式の代わり。

最終試験はなかったが、勉強したことを長い論文にして提出しなければならなかった。その論文がこれだ。

老教授の最後の授業に出た学生はたったのひとり。

それはほくだった。



一九七九年の晩春、じつとりと暑い土曜の午後。何百人もの学生が、キャンパスの芝生に並んだ木の折りたたみ椅子にずらっと列をなして座っている。全員青いナイロンのローブを羽織っている。長いスピーチにじりじりしてきた頃、やつと式が終わって、一斉に帽子を空に放り上げる。これでめでたくマサチューセッツ州ウォルサムのブランドイス大学専門課程卒業。多くの学生にとっては子ども時代の終幕だった。

式のと、大好きなモリー・シュワルツ教授をさがし出して両親に紹介する。小柄でちょこちょこ歩く先生は、強い風が吹けばたちまち雲の上まで持つていかれそう。卒業式用ローブをまとったその姿は、さながら聖書に出てくる預言者とクリスマスの妖精の間の子といったおもむきだ。青緑の目がきらきら輝き、薄くなりかけの銀髪が額に垂れている。大きな耳、三角の鼻、ふさふさしたグレーの眉。歯は曲がっていて、特に下の歯は、誰かにパンチをくらったみたいの後ろに引っこんでいるが、笑うと、世界始まって以来最初のジョークを聞いたような表情になる。

先生は両親に、ぼくが先生の授業に全部出ていた話をする。「すばらしい息子さんですね」照れくさくなって足もとに目をやるぼく。別れ際にプレゼントを手渡す。イニシャルを入れた赤

革のブリーフケースで、前の日に買っておいたものだ。先生のことを忘れたくなかった。ぼくのこと先生に忘れてほしくなかったのかもしれない。

「ミッチ、こんなにしてくれて……」ブリーフケースをほればれと見つめながらそう言ったあと、先生はぼくを抱きしめる。背中に感じるその細い腕。

ぼくのほうが背が高いから、こっちが年上のようにできまりが悪い。まるでぼくが親で先生が子どもだ。

「どきどき連絡してくれるね」

「もちろんですとも」間髪を入れず答える。

離れた先生の目に涙が光っていた。

講義概要

死の宣告は一九九四年の夏にやってきた。かえりみてモリーは、それよりもずっと前に何かよからぬことが起ころうとしているのがわかってはいた。ダンスをやめた日だ。

この老教授は、ダンスなしでは夜も日も明けなかった。音楽は問わない。ロックンロールでも、ビッグバンドでも、ブルースでも、何でもござれ。目をつぶり、しあわせそのものの笑みを浮かべ、自分のリズムに合わせて体を動かし始める。必ずしも美しいとはいえない。しかし、そんなときはもうパートナーのことは眼中にない。モリーはひとりで踊っていた。

いつも水曜の夜にはハーヴァード・スクエアの教会に出かけた。お目当ては「ダンス・フリ」。ライトがチカチカ、スピーカーがボンボン鳴っている。ほとんどが学生のその人ごみの中へ、モリーは、白のTシャツ、黒のスウェットパンツ、首にタオルといういでたちで現れ、何でもかまわない、かかっている音楽に合わせて踊るのだ。ジミ・ヘンドリックスのロックにはジルバだった。体をねじりくねらせ、アンフェタミン（中枢神経刺激剤）をのんだ指揮者よろしく腕を振り回し、やがて汗が滴り落ちる。誰もこれがすぐれた社会学の博士で、何年も大学の教授を務め、りっぱな本を何冊か書いているとは知りもしない。おかしなじいさんだ、ぐらいにしか思っていない

い。

いっだったか、先生はタンゴのテープを持ちこんで、かけさせたことがある。そのときはホルをひとり占めにして、前後にサッサツと体を動かす踊りっぷりが、まるで恋の情熱ほとばしる男のおもむき。終わるとフロアじゅうの喝采を浴びたものだ。その晴れの瞬間が永遠につづいてもよかったのだが……。

やがて、そのダンスができなくなった。

六十を超えてから喘息ぜんそくになった。呼吸が苦しい。ある日、チャールズ・リヴァーのほとりを散歩しているときに、突然冷たい風が吹きつけて息ができなくなり、病院にかつぎこまれてアドレナリンを打たれた。

二、三年後には歩行障害が起きた。友人の誕生パーティーでわけもなく足がもつれる。あるときは劇場の階段を転げ落ち、周囲の人をあわてさせた。

「酸素吸入だ！」誰かが叫んでいた。

この頃はもう七十代。みな陰で「お年だから」と言いながら、立つときには手を貸していたが、モリーは自分の体のことは誰よりもわかっていて、何か具合の悪いところがあるという意識があった。ただの「お年」なんかじゃない。しょっちゅうくたびれる。よく眠れない。死ぬ夢も見る。医者にかかることにした。とつかえひつかえ。血液検査に尿検査。下から内視鏡を突っこんで腸も調べる。何も見つからない。とうとうひとりの医者が、筋肉の生検をしようとして、ふくら

はぎから切片を取った。検査室からもどってきた報告は、神経に問題があるらしいとのことで、またまた検査の連続。そのうちの一つは、特別な椅子に座って、ピッピッと電気を流される——言ってみれば死刑用電気椅子のたぐい——それで神経の反応を調べるのだった。

「もう少しチェックする必要がありますね」と、結果を見たドクターたちは言う。

「どうして？」とモリー。「いったい何なんですか？」

「まだはつきりしません。どうもあなたのテンポがのろいんです」

テンポがのろいって、どういうこと？

一九九四年八月のむしむしする暑い日だった。とうとうモリーと妻のシャーロットは神経科の診察室に向いて担当の医師の前に座り、ご託宣を聞かされた。筋萎縮性側索硬化症（ALS）、別名ルー・ゲーリッグ病。容赦ない残酷な神経疾患だ。

今のところ治療法はありません。

「どうしてそんなものになったんでしょう？」

誰にもわかりませんね。

「もうだめっていうこと？」

はい。

「じゃあ、死ぬわけですか？」

たいへんお気の毒ですが。